

「夕暮れの業務スーパー／いちめんの／まだうごかない／なにかのふくろ」うたた（岡山県）

ふくろの抒情に惹かれた。それはたいてい風に揺れ、ときには空へ舞い上がる。しかしこのふくろはうごかない。いちめん、というのも気になる。レジふくろではないのかもしれない。さあ、なんでしょう？

「傘立ては雨の靴下／居ない人の声を／思い出すところに履く」常田 瑛子（山口県）
傘の靴下ではなく、雨の靴下というところに、常田さんの視野の広大さが表れている。

「出血のたびに小鳥がやって来る」桜庭 紀子（和歌山県）
小鳥の可愛らしい赤い舌がチラリと脳裏をよぎる。ごく小さな出血だろう。小鳥がくるならそれもよいかなと一瞬、倒錯するほど、巧みな仕掛けを秘めている。

「あおむけの俺しか見えない仏壇に／幽閉された盆の曾祖父」秋山颯汰朗（群馬県）
このあおむけの位置から仏壇を見遣るひととき。畳に寝転ぶ夏のおわり。「俺」と曾祖父のふたりしか知らない時間が、たしかにここにある気がする。

「雨音のオーケストラ／おたまじゃくしが／手をつないで踊ってる」なみなみ（広島県）
イメージとしては平凡かもしれない。それなのになぜこんなにも楽しい気分になるのだろうか。おそらく平凡であることの素晴らしさが表現されているのだろう。

「カヌーは傾いて／なぜか涼しく軋むから／貴方がこちらに來たとわかる」森川 紬（福井県）
ゆうれいが読んだらよろこびそうな一作。傾きとは信頼のおもさによるものかもしれない。

「空になった／ヨーグルトの容器を洗って／なにかを入れるかもしれない」箭田儀一（広島県）
未遂の時間の豊かさに勝るものはないのかもしれない。それは期待と言いかえることもできる。そんな余白ぶぶんをだいじにしながら前へ進みたい。

「晒井の／底に残った／春の色」露木 秋一郎（東京都）
色が書かれていないからこそ、惹かれる。自分で色をつけようと思わなくても色が浮かぶ。りきまないことが、底力、なのだろう。

「くだものをあずかっている／嘘をつくときは／だいじなものと引き換え」まちのあき（宮城県）
虚言癖というものに遭遇したことがある。なるほどたしかに、そのひとは、心の奥のもつとも甘くてやわらかなものを喪失しているように見えた。あれはくだものだったのか（私はくだものをもらっていたのか）。

「スカーフは／決意のように燃えていて／教室をでる赤いくるぶし」はるかぜ（大阪府）
十代は何度も決意をする。決意のエネルギー消費はすさまじく、スカーフが燃えることも
比喩ではないかもしれない。

面白い作品がとても増えたと思います。次回も楽しみにお待ちしております。